

離島・僻地医療に貢献できる薬剤師養成教育システムの構築2:医学部生と共に学ぶ離島医療・福祉・保健実習の展開

○荒木 良介¹, 中嶋 弥穂子¹, 中里 未央¹, 前田 隆浩¹, 大園 恵幸¹, 青柳 潔¹, 塚元 和弘¹, 畑山 範¹(¹長崎大院医歯薬)

【目的】長崎大学薬学部では、平成19年度から離島・僻地を多数抱える長崎県の地域性を活かし、五島列島の病院、薬局、保健所、役所、福祉施設での離島医療・福祉・保健実習（離島実習）を開始した。本実習は、医療チームの一員としての自覚とコミュニケーション力の向上を目的の一つとして、薬学部生が医学部生と合同で地域医療を体験し、離島で全人的医療を学ぶものであり、従来の薬学教育にはなかった新しい取り組みである。本発表では学生の実習評価の結果を報告する。

【方法】病院と薬局での実務実習を終了した薬学部4年生79名を20グループに分け、上五島コース（新上五島町）か下五島コース（五島市）のどちらかで1週間の離島実習を実施した。実習地域の基幹病院には実務経験のある薬学部教員が常駐し、医学部生の実習担当教員や各実習施設の指導担当者と協力して学生指導にあたった。また医学部5年生と合同で保健所、役所および福祉施設において、離島の保健福祉の実態を体験学習した。特に五島市役所での実習では、地域住民を対象とする健康教室において薬学部生と医学部生が分担して講話を行った。本実習が医学部生との一部合同実習であることなどの内容について実習の前後に学生にアンケート調査を行い、本実習の評価を行った。

【結果・考察】実習前、8割の学生は離島実習が不安であると回答したが、医学部生との一部合同実習になっていることに対しては期待している学生も8割を占めていた。実習後のアンケートでは、実習は面白かった（8割）、医学部生とのコミュニケーションは簡単だった（7割）、薬剤師としての今後の方向性の参考になった（9割）との回答が得られ、本実習が学生にとって有意義であったことが示唆された。